

報效義会のシュムシュ島への移住と シコタン島のアイヌ帰還問題

麓 慎一

はじめに

日本は、樺太・千島交換条約により千島列島をその領土に編入した。しかし、千島列島、とりわけ北千島は厳しい気候条件と遠隔なために実行支配を及ぼすことが困難であった¹。さらに、明治17（1884）年にシュムシュ島からアイヌをシコタン島に移住させたことで北千島は、国民なき国土となった²。このような状況を郡司成忠という人物が報效義会という団体を立ち上げて打開しようと試みた。

本稿の課題は、この報效義会の北千島への移住を分析し、千島列島の「内国化」の過程を明らかにすることである³。この問題には、シュムシュ島からシコタン島に移住させたアイヌの北千島への帰還という問題が密接に関係していた。北千島に実行支配を確立する、という点から考えた時、このアイヌの帰還問題は報效義会の活動とともに重要な意義があった。それゆえ、この両者の関連にも留意して分析を進める。

1 郡司成忠の帰京

郡司成忠は、明治26（1893）年3月5日、横須賀小学校で報效義会の命令式と成立式を行い、3月20日に隅田川を出発して、千島列島に向かった。郡司成忠と報效義会員たちはシュムシュ島とシャスコタソ島に分かれて越冬した。シュムシュ島には、郡司成忠・白瀬臺・坂本吉五郎・小野亀次郎・森音蔵・加戸乙平・上田幾之助の六人が、シャスコタソ島には、井上儀蔵・高橋錢五郎・堀江彪・目黒広吉・田中留吉・鳴村金一・木村佐吉・中村重吉・鶴島久次

郎の九人が越冬した⁴。

北方海域における測量と「密猟船取締」の任務に就いていた軍艦磐城が、シュムシュ島とシャスコタソ島で越冬した彼らを迎えるために派遣されることになった⁵。磐城は、明治27（1894）年6月5日、函館港を出発して室蘭港に入港した。磐城の艦長柏原長繁は、6月10日、ここで海軍大臣西郷従道と海軍次官（軍務局長兼任）伊藤雋吉からの電報を受け取った。海軍大臣西郷従道は、磐城に「密猟船取締」の任務を遂行するために根室から千島列島の近海を巡航して速やかに根室に戻るように指示した⁶。一方、次官の伊藤雋吉は、この磐城に対する千島巡視の指示を踏まえて、「郡司大尉の一行、糧食欠乏に迫り居る由の處、貴艦本日千島巡航の訓令ありたれば、幸い郡司の一行に便利を与えることに補助せられたし」と打電した⁷。このように伊藤は、郡司ら報效義会員の援助を磐城に指示した。

磐城は、訓令を受けて6月13日、根室港に入港し、6月18日には郡司成忠の実父である幸田成延、北海道庁技師石川貞治、白毫寺住職土岐虎闘らを乗船させて根室を出発している⁸。その後、磐城は、6月20日、エトロフ島の紗那で報效義会員の葛原益吉・御園生龜三郎・社川延蔵・山本敏・閔誠一ら五人を乗船させて、シャスコタソ島に向かった⁹。6月25日にシャスコタソ島に到着した磐城は、越冬しているはずの九名の報效義会員の捜索を開始した。翌日の6月26日になってようやく家屋を発見することができたが、高橋伝五郎・目黒広吉・井上義蔵・田中留吉らはすでに死亡していた¹⁰。彼らが住んでいた家屋に残されていた田中隆吉の日記には、明治26（1893）年10月9日に鳴村金一・鶴島久次郎・吉村重吉・堀江彪・木村佐吉の5人がエカルマ島に渡航したが帰還しなかった、と記されていた¹¹。磐城に乗船していた僧侶の土岐虎闘が読経し、四人の墓碑

が建てられた¹²。

艦長柏原長繁は、幸田成延と協議してエカルマ島に渡航した、と推定される五名の搜索は行わないことにし、6月27日、シュムシュー島の片岡湾に磐城を入港させた¹³。郡司らが磐城に乗船すると柏原は、シャスコタン島で越冬した九名の死亡を伝えたうえで、報效義会に関する状況を次のように述べた。第六回帝国議会において貴族院議員谷干城が報效義会への予算措置を求めて「報效義会保護案」（「千島移民保護に関する建議」）を提出し、貴族院を通過できずに廃案になったものの報效義会に対する保護の気運は高まっている。さらに、この「保護案」について、建議しようとする者が予算案を作るのに郡司らの活動を詳細に知らなければならないので、「一度京に出で占守の実況を北海道庁長官に具状し、^(シムシュー)君が所見を保護案建議者に陳上」する必要がある、と指示した¹⁴。さらに、柏原は日清戦争の状況を説明して報效義会員の内地への撤収を促した。しかし、郡司は、白瀬臺を含む5人をシュムシュー島に残留させることを決定した。この点については後述する。

磐城は、明治27（1894）年7月1日、シュムシュー島の片岡湾を出発した¹⁵。郡司は、7月4日、エトロフ島の紗那に到着し、7月19日には東京に戻っている¹⁶。郡司には加治乙平・坂本吉五郎・小野亀次郎・森音藏・上田幾之助ら5人の報效義会員も同行していた¹⁷。

『読売新聞』に7月20日付で掲載された「郡司大尉帰京す」と題する記事は、郡司の出京の目的を「千島に於ける経験及び将来千島に対する意見等を北垣北海道庁長官に具申し、其意見を聞いて、将来の施設を為さんとする」ことである、と伝えており、郡司は軍艦磐城の艦長柏原の提案を受け入れて、上京したと推定される¹⁸。実際、郡司は、7月20日に内務省に出頭し、安広秘書官に面会して千島列島の気象に関する報告を行った後、北垣国道北海道庁長官に面会している¹⁹。さらに、7月22日には精養軒において近衛篤磨公爵・谷干城子爵・小沢武雄男爵ら40名あまりの有志者に北方探検について話し、さらに翌7月23日には井上毅文部大臣の周旋により永田町の官邸において開催された晩餐会に出席して、ここでも千島列島の状況を報告している²⁰。このように郡司は、上京して北垣長官に面会するとともに政府の中核に千島列島の実情を知らせ、報效義会の広報活動に奔走した。

2 白瀬臺による第2回目の越冬

シュムシュー島から報效義会員を引き揚げさせるために軍艦磐城でエトロフ島からやってきた幸田成延と5名（坂本彦太郎・池野善三郎・山本禮吉・林富次郎・信澤與一）の報效義会員は、シュムシュー島に残留することを希望した²¹。郡司は、白瀬臺を再び残留させるとともに、新たに杜川延三・葛原益吉・山本敏・閔誠一・御園生亀三郎をシュムシュー島で越冬させることにした²²。磐城の艦長柏原は、日清戦争の勃発によって千島列島へ航行する船舶が無くなることを懸念して、郡司成忠をシュムシュー島から引き揚げさせようとしていたのであるが、郡司は6人の報效義会員を残留させた。この点について、越冬を命じられた白瀬は、郡司が父親である幸田成延のシュムシュー島への残留を断念させるために白瀬に「脅迫的残留を奨励した」と記して、残留させられることに強い不満を吐露している。なにより白瀬は、これにより日清戦争に従軍する機会が失われたことに失望したのであった²³。

このような不満を抱いた白瀬ではあったが、果敢に新たな事業の展開を試みている。白瀬は、最初に一年間の活動予定を作成し、カムチャッカのペテロパブロフスクに向かう計画を立てた。彼は、ペテロパブロフスクの探検と調査は、将来のカムチャッカとの貿易に必要な航路を開設するために有益である、と考えた²⁴。彼は、自らを「ペートルボルスク渡航責任全権者」とし、「計画書」（「発着に関する事項」）を7月21日付で作成した。その「計画書」によれば、渡航者は、白瀬・杜川・御園生・閔の四名とし、15日間ほどでペテロパブロフスクに到着する。上陸後は、「漂流者」である、とペトロパブロフスクの「鎮台指令部」に届け出て、その指示に従う²⁵。白瀬らは、計画を実行に移し、7月25日に片岡湾を別飛方面に向って出発した²⁶。カムチャッカのロバトカ岬の対岸に到達したものの天候が悪化し渡航できる状態ではなかった。白瀬は、渡航を中止して、シュムシュー島の「一周探検」に計画を変更し、7月26日にロバトカ岬の対岸を出発した²⁷。一行は、7月27日、片岡湾に戻っている²⁸。白瀬を含め6名がシュムシュー島で越冬したが、翌年の明治28（1895）年4月19日に杜川延三が、5月7日には御園生亀三郎が、5月13日には山本敏が死亡し、葛原益吉も神經症となっている²⁹。

白瀬らのシュムシュー島における活動で触れておき

たいのは、明治28（1895）年7月1日に到来した英領ヴィクトリアのブレンダ号のことである。ブレンダ号は、この日、シュムシュ島の片岡湾沖で暗礁に乗り上げた。乗員26名は、糧料や獸皮などの荷物を陸揚げするとともにテントを張って船が来るのを待つ一方で、船長は、7月2日、日本人の乗組員田中久次をともなって白瀬嶺のところにやってきて状況を説明した³⁰。

それによれば、田中久次は、ヴィクトリアに出稼中にオットセイ獣帆船のブレンダ号に水夫として雇われた人物だった³¹。また、ブレンダ号は、明治28

（1895）年3月に横浜港に寄港し、3月28日に同港を出航し金華山沖から函館沖を通過し、シコタン島で薪水を搭載したのち、シュムシュ島の近海を航行していく、座礁したのであった³²。

4日後の7月5日にオットセイ獣帆船であるジネーバ号とオーシコンベル号が、シュムシュ島に到来した。ブレンダ号の船員は、横浜に行くことを希望した田中久次とチャレーを残してこれらの船で7月7日にシュムシュ島を離れカナダに向かった³³。二人は、日本の船が来ることを期待して残留したが、チャレーは、8月4日に到来したアナカンド号でシュムシュ島を離れた³⁴。

残った田中は、白瀬嶺とともにシュムシュ島を離れるために明治28（1895）年8月27日に八雲丸に乗り込んだ³⁵。この辺快三所有の八雲丸（船長武山惣次郎）は、6月15日、函館を出発し、8月21日、柏原湾に入港したのであった³⁶。八雲丸には、白瀬らに宛てた函館区長財部義の書翰が託されていた。その書翰には、彼らをエトロフ島の紗那へ引き揚げさせるために八雲丸を派遣したことが記されていた³⁷。これを受けて白瀬らは、シュムシュ島から撤退することを決定したのであった。

白瀬は、離島にあたって片岡湾に碑を建てた。一つは、明治26（1892）年8月にシャスコタン島に上陸後、越冬の際に死亡した鶴島久二郎外八名の墓碑である。もう一つは、今回の越冬で死亡した杜川延三・御園生三郎・山本敏の墓碑である。さらに「念晴至乃碑」として日清戦争に従軍できなかった苦渋を書き記したうえで「嗚呼人間万事塞翁賀馬」と末尾に記し、「愚痴乃屋主人 白瀬謹書」と署名した碑を残して出発した³⁸。

八雲丸は、明治28（1895）年9月3日にシャスコタンを経由して10月7日にエトロフ島の紗那に入港した³⁹。一方、チャレーを乗せてシュムシュ島を出航したアナカンド号は、函館を経由して9月16日に

横浜港に寄港した。郡司は、シュムシュ島の報效義会員たちの情報を得るために横浜でチャレーに面会した。彼は、次のように報效義会員たちの状況を詳細に伝えた。ブレンダ号の26人の内、24人が7月7日に到来したジネーバ号とオーシコンベル号で出発した。彼と田中は、残留して報效義会員たちと生活したが三名（杜川延三・御園生亀三郎・山本敏）が死亡した。彼は、白瀬嶺・葛原益吉・関誠一に食糧やラッコ猟のためのボート一艘と火薬などを贈与して8月4日に寄港したアナカンド号でシュムシュ島を出発した⁴⁰。

このようにして郡司は、シュムシュ島における報效義会員たちの情報を得たのであるが、既述のように彼らはほどなく八雲丸でシュムシュ島を離れることになった。

3 シュムシュ島移住の準備

郡司は、明治27（1894）年11月12日、「大連湾水雷敷設隊分隊長」として日清戦争に従軍していたが、明治28（1895）年3月25日に大本営において職を解かれた⁴¹。彼は、報效義会のシュムシュ島への移住計画の再開に着手し、最初にエトロフ島から報效義会員を呼び寄せた。会員の松井鋒吉が、5月30日、東京に到着した。エトロフ島の報效義会員たちは得意な分野で就労し、自活して報效義会員の遺族を扶助しつつ、将来のシュムシュ島への移住に備えていた⁴²。

郡司は、移住計画を進める一方で、その広報活動にも精力を注いだ。ここでは、二つの活動を紹介しておきたい。第一は、東京地学協会での演説である。彼は、明治28（1894）年12月13日、地学協会の例会において演説と報告を行っている⁴³。地学協会の雑誌である『地学雑誌』に掲載された報告は、明治26（1892）年以来の報效義会の活動と現状が述べられている。報效義会の活動については、日清戦争が当初の予定を大きく狂わせたことを吐露している⁴⁴。それ以外の活動報告としては、気候に関するものが主であった。それは、郡司が、明治26（1892）年2月15日に地学協会から「千島に於て地学上裨益となるべき事項」の報告を依頼されていたからであった⁴⁵。郡司は、日清戦争で派遣された大連とシュムシュ島を比較して気候の状況を説明している。

第二は、大阪で実施された「幻燈説明会」である。郡司は、明治29（1895）年1月11日、農商務省から「千島群島水産調査」の名目で貸与されることになっ

た石川丸を受け取るために呉港に向けて上野を出発した⁴⁶。彼は、3月2日、石川丸に乗船して呉港から大阪に到着し、大阪造船会社に石川丸の修理を依頼した。呉港に戻り農商務省より下付された龍睡号に乗り、3月28日、大阪木津川に到着している⁴⁷。この龍睡丸は、修理に多大な時間を要することが分かり、大阪府に預けられることになった。

大阪に滞在することになった郡司は、明治29（1895）年4月14日、大坂造船会社が発起し、大阪毎日新聞社と大阪朝日新聞社が協賛した大坂土佐堀青年会館における「幻燈演説会」で演説を行った⁴⁸。2500名あまりが集まった。郡司は、千島列島の動植物や山川・港湾などの写真、イギリス人によって作成された図版とスノーの報告書を用いて演説を行った⁴⁹。エトロフ島の状況、とりわけエトロフ島のアイヌである高木重吉を紹介し、鮭・鱈・トド・オットセイ・クジラなどの海獣類について詳細に解説している。特に、トド・オットセイ・クジラは、外国船による密猟が横行しているにもかかわらず、日本の密猟船に対する取締が不十分であるのに対して「露国の如きは浦汐斯徳よりペールボロスキーの間、特に軍艦四隻を以て常に之を巡航せしむ」ことをあげて、海洋資源に対する取り組みの相違を指摘している⁵⁰。この演説会が終わり、郡司は4月17日、安治川を出發して品川に向かった⁵¹。

このように郡司は、報效義会の広報活動を精力的に推進した。一方、政府も報效義会の活動に財政的な支援を行うことを決定した。次にこの問題を取り上げる。郡司は、明治29（1895）年5月7日、札幌の北海道庁に来朝した⁵²。彼は、「北海道千島移民費」として下付されることになった2万5000円のうちの9000円を受け取る手続きのために北海道庁に来たのであった⁵³。

この「北海道千島移民費」が与えられることになった経緯について確認しておきたい。この「移民費」は、内務省の「歳出臨時部」の第10款第1項「北海道千島移民費」として第九回帝国議会に予算要求された。衆議院では、明治29（1895）年1月16日の予算委員会の第1科（内務省及文部省所轄）で審議された⁵⁴。衆議院議員の平島松尾は、この予算と郡司成忠の千島への移住との関係について「此千島ニ於テハ、十分将来此地方ヲ開拓」する見込みがあるのか否かについて問い合わせている⁵⁵。政府委員の北海道庁長官北垣国道は、この予算が第七回帝国議会に提出されたものと同様の予算で、「占守ノ如キハ実ニ劣等ノ地デ人ノ往ク所デナイ」場所に郡司成忠ら

が移住するのを援助するためのものである、と答弁している⁵⁶。

貴族院でも次のような審議がなされている⁵⁷。2月27日に開催された貴族院の予算委員会で、議員の西村亮吉の質問に対して北垣国道は、この「移住費」が「郡司大尉ノ占守移住ヲ保護シマスルノデ、此額ニ二万八千円ノ補助ヲ三箇年ニ補助シマス」と、報效義会への補助であることと、それが三年間の予算であることを説明している⁵⁸。さらに北垣は、報效義会の活動について次のように詳細に答弁している。報效義会は、明治29（1895）年6月までに移住の準備を行い、7月には郡司成忠が62名を連れてシュムシュ島に移住する。移住したものたちは、陸上で労働するものと海上で労働するグループに分かれる。後者は、シュムシュ島と函館および横浜を航海して、シュムシュ島における事業のための荷物を運送するものと漁獵に従事するものに分かれる。このように「北海道千島移民費」として報效義会への予算措置が審議されて、その活動内容が議会において周知されるようになった。

郡司成忠の動向に戻る。修理を終えた石川丸は、6月19日に品川を出發し、7月7日に函館港に到着している⁵⁹。一方、郡司は、陸路で東京を出發したのち、北門丸に乗船して6月28日にエトロフ島の紗那に到着した⁶⁰。さらに、7月7日にエトロフ島を出發して7月15日に函館に到着、7月17日に原保太郎北海道庁長官に面会するために札幌に出發したが、7月23日には函館に戻っている⁶¹。

4 シコタン島への航海とのアイヌ

郡司は、明治29（1896）年8月19日、五洋丸で函館を出發した⁶²。五洋丸には、郡司を含め20人が乗船していた⁶³。17人の報效義会員以外に清水興孝（大日本水産会附属水産伝習所卒業生）・池本善太（水産実習目的）・富田千代造（獵師）が乗船していた⁶⁴。五洋丸は、8月21日、厚岸港に入港し、屯田兵屋と同じ構造の家屋を六棟建設できる分量の資材と家畜を積み込んだ⁶⁵。

五洋丸は、8月23日、エトロフ島の紗那に向って航行していたが、強風を避けるためにシコタン島の斜古丹湾に入港した。斜古丹は、明治17（1884）年に北千島から移住させられたアイヌたちが集住されていた場所である。会員の加藤洋は、リーダーのヤーコフに面会することを求めたが、彼は水先案内人として軍艦武藏に搭乗していて斜古丹にはいなかつ

た。そこでイヨンに面会することになった。イヨンは、最初に加藤らの行き先を尋ねた。加藤は、シュムシュ島に移住する目的で旅行していることを伝えると、彼は「郡司大尉に従ひて占守^(シュムシュー)に行かんことを願ふ久し、郡司大尉今何処にある」と、シュムシュ島への移住に同行する許可を得るために郡司成忠に面会したい、と申し出た⁶⁶。これは受け入れられ、イヨンは郡司に面会し、同行の許可を求めた。それに対して郡司は、次のように諭して申し入れを断った。かつて住んでいた場所はラッコやオットセイなどが多く、またロシア商人との貿易により生活に困難を感じることはなかったであろうが、現在は外国の密猟船のためにそれらは乱獲され、収穫も著しく減少している。従って、以前と同じように生活できるか否かは疑問であり、移住して後悔することも予想される。報效義会は、アイヌの移住を喜んで迎え入れるところであるが、そのような困難にアイヌが直面するのは気の毒である。そこで、今年は数人のアイヌで帰還してみてその結果を踏まえて最終的に判断すればよい、と郡司が提案した。彼は、このアイヌの試験的な帰還のためには、アイヌたち自身の協議も必要であろうし、彼らを管轄している戸長に報效議会の意向を説明して許可を得る必要もある、と考えて会員の加藤洋をアイヌが戸長を訪問するさいに同行させることにした。まず、七名のアイヌに加藤を含めた話し合いがもたれた。加藤は、アイヌたちに移住の希望について質問した。アイヌたちは、

千島ハ我等墳墓の地なるものを争で帰る事を希望する者あるべき是迄帰住を願ひしこも屢々なれど少しも願意を達せざるこそ恨めしけれ^(いか)

と答えた。シコタン島に移住させられたアイヌたちは総じて北千島への帰郷を求め、そのための行動を起こしていたようである。リーダーの代理であったアウエリアンによれば、すでに戸長の成田九内と根室の郡長一林悦郎根室外九郡長と推定される一に面会し、帰還の準備として数名のアイヌを派遣したい、と願い出ていた。郡長は自分だけでは判断できないとして、このことを稟議して北海道庁長官の判断を仰ぐ、と回答していた。しかし、それからすでに数カ月が経過していたのであった。アイヌたちは、再び帰郷のために請願したとしても成果はないであろう、と逡巡したが、沈黙していくは何も得られない、と成田九内戸長を訪問して帰郷について再び要望した。しかし、成田は郡長からの指示が無い、として

取り合わなかった。アイヌは、加藤に来年はこのことが進展するように郡長と札幌の北海道庁長官に働きかけ、その結末を知らさせてくれるように懇願した⁶⁸。

このようにシコタン島に移住させられたアイヌたちは、シュムシュ島への帰還を望んでいた。実は、この問題は第九回の帝国議会でも取り上げられていた。衆議院では、明治29（1896）年1月16日の予算委員会において「千島ノ土人救済費」が審議され、その中でシュムシュ島へのアイヌの帰還問題が議論された。委員の平島松尾が、シコタン島のアイヌたちがシュムシュ島に戻ることを希望している、と発言したのに対して政府委員の北垣は、「ソレハ自由ニ任セテゴザイマス、唯今デハ通常占守ニ帰ルト難儀スルカモ知レヌ⁶⁹」と、帰還是自由であるが、その後の生活に困難を来たすのではないか、との危惧を表明している。さらに、この問題は、明治29

（1896）年2月27日の貴族院予算委員会でも議論されている。西村亮吉は、明治17（1884）年に北千島から移住させられたアイヌたちをシコタン島から帰還させ無いのか、と問い合わせた。答弁に立った政府委員の北垣は、今年からアイヌたちの帰還については、彼らの自由に任せられている、と答弁している。西村は、アイヌたちがシュムシュ島への帰還を望んでいると聞き及んでいたので、その点をさらに質問した。これに対して、アイヌたちが帰還を望んでいることは知らないが、これまでアイヌたちがそれを願い出たことは無い、と北垣は答弁している。西村がさらにアイヌたちが帰還についての手続きを知らないので願い出ていないのではないか、と執拗に質問すると、アイヌはその手続きについて知っており、さらに戸長役場もあるので願い出るのは容易なことである、と北垣は説明したうえで、シコタン島における生活はとても楽なので「コチラカラ想像シテモ今占守ニ帰リタイト思フ者モアルマイト思フ位デアリマス⁷⁰」と、自らの見解を示した。シコタン島に移されたアイヌたちの主張は、北海道庁長官を務めていた北垣国道には全く理解されていなかったようであるが、少なくとも、シュムシュ島のアイヌの帰還を議会の答弁にあたった政府委員の北垣が容認していた点に留意しておきたい。

五洋丸が、シュムシュ島に向う途中でシコタン島に寄港し、そこで郡司とアイヌの間で行われた会談と、それに関連してアイヌたちの「救済費」に関する審議を考察した。再び、五洋丸の動向に戻ることにしたい。五洋丸は、明治29（1896）年8月25日、

シコタン島を出航してエトロフ島に向った。シコタン島を出航する際に、軍艦武蔵が入港して五洋丸の出航を祝し、武蔵に乗船していた菊磨王殿下から「汝等が事業の成功を祈る」と信号が送られた⁷¹。五洋丸は、8月26日、エトロフ島の紗那に入港し荷物を積んだのち、紗那郡長佐藤志郎らによる送別会が催され郡司成忠と幸田成延らが招かれた⁷²。五洋丸は、8月27日に紗那を出発し、シベトリ港で荷物をさらに搭載してシュムシュ島に向かい、8月30日、別飛湾に到着したが、上陸地点は片岡湾であったので上陸はせず、9月1日になってようやく目的地の片岡湾に入港できた⁷³。

郡司成忠らのシュムシュ島における移住の状況を考察する前に、五洋丸の行程と先に触れたシコタン島のアイヌたちの動向について付言しておきたい。

五洋丸は、郡司の父親の幸田成延、娘の郡司悌子、報效義会東京支部長加藤洋と木村清吉を乗船させ、シュムシュ島を9月6日に出航して、9月9日にエトロフ島に到着した⁷⁴。加藤は、林悦郎（根室外九郡長）と会談する機会に恵まれた。林は、シコタン島のアイヌについて来年には必ず三組の夫婦を帰郷させて、すべてのアイヌが帰郷しても生活が成り立つか否かについて確かめる予定である、と明言した⁷⁵。少なくとも、郡長レベルでは、アイヌの帰還が検討され、そのための方策が講じられる状況になっていたことが確認できる⁷⁶。

5 シュムシュ島における報效義会の活動

五洋丸に搭載された移住準備品は、9月6日には全て陸揚げされた。物品は建設された5棟の仮小屋に収納された⁷⁷。問題となったのは食糧の確保だった。シュムシュ島への到着が遅れたため、食料として期待していた鮑はすでに捕獲の時期を逸するのではないか、と懸念された。そこで郡司は、9月18日、紅鮈の捕獲のために別飛川の上流に数名を派遣した。1000尾ほどの水揚げがあり、明治29（1896）年末までにさらに1000尾ほどを捕獲し、塩漬けにすることができた⁷⁸。一方、10月15日には六棟の家屋が完成了⁷⁹。11月13日に開島式が挙行され、以後、「開島記念祭」がこの日に催されるようになった。事務所や牧舎など予定していた建物は、神社を除いて、11月18日には完成し、これ以後、漁業や獵業一中心は狐猟一に本格的に従事できるようになった⁸⁰。しかし、全てが順調に進展したわけではなかった。郡司らを苦しめたのは、厳しい気候だけではなかった。

これまででもいく人の犠牲者を出していった「水痘病」がまた発生し、年が明けた明治30（1897）年1月から8人の死亡者を出す事態となつた⁸¹。郡司は、明治30（1897）年からは海上でも建網を使って漁業を行う予定であったが、この「水痘病」のために計画を変更せざるを得なくなり、5月16日に報效義会員を別飛川に向かわせることにした。別飛における漁業の拠点となった「別飛漁舎」は、6月24日に完成している。別飛川における「紅鮈漁業」を中心に事業が展開され、7月24日からは鮈の缶詰が製造されるようになった。8月20日までに900個の缶詰が製造されている⁸²。翌年の明治31（1897）年10月頃までの食料や必要な物品を陸揚げするために明治30（1896）年7月24日に入港した石川丸は、8月20日に出港する際に紅鮈と鮈を約100石ほど積み込んでいる⁸³。さらに、海上での獵業も3月21日から開始することができ、海豹獵や鴨獵などが行われた。6月2日からは開墾事業にも着手し、7月24日までに3万歩余りが開墾された。

明治29（1896）年9月から明治30（1897）年8月まで報效義会の状況をまとめた『事業報告』は、事業の開始にあたって多くの支出があることは通例であるが、「水痘病」によって事業の中止や縮小にあつたことを記したうえで「投セシ資本ハ将来有形無形ノ間ニ漸次ニ其効果ヲ呈シ、大ニ事業ノ進行ヲ容易ナラシムベキヤ明カナリ」と、事業の将来の展開に大きな期待を寄せている⁸⁴。

6 軍艦武蔵の派遣とアイヌの帰還

軍艦武蔵は、明治30（1897）年度も「北海道沿岸密猟制止」の任務に就くことになった⁸⁵。武蔵は、この任務のために三度の巡航を実施したが、第二回目の巡航の際にシコタン島のアイヌを乗船させてシュムシュ島とホロムシロ島に来航した。軍艦武蔵の艦長遠藤藏蔵が明治30（1897）年6月30日に提出した「報告書」に依拠して同艦の動向を分析し、特にシコタン島のアイヌの帰還について考察する⁸⁶。武蔵は、明治30（1897）年5月9日、函館港を出航し、5月18日、根室港に到着した⁸⁷。同艦は、5月28日に根室を出航する際に林悦郎（根室外九郡長）・門馬豊次（根室毎日新聞社員）・土岐虎闘（真宗本願寺派僧侶）^(シコタツ)と「其筋ノ命ニ依リ色丹土人十名ヲ其生土ナル幌筵島南岸カハリー角ニ移住セシメタリ」と、ヤーコフ・イヨン・コケハルの三夫婦と子供四人、合計10名のアイヌを乗船させ、6月3日にシュムシュ

島に到着した⁸⁸。

武藏は、6月9日、ホロムシロ島の武藏湾にヤーコフたちを降ろし、「本年は試験の為め出稼せしものなれは、明年は一先づ引揚ぐる」ことを諭した⁸⁹。彼らの獵業の成績によって、シコタン島から全員を移住させか否かが決定されることになっていた⁹⁰。

ホロムシロ島のアイヌたちはどのような状況だったのであろうか。報效義会を退会して明治30（1897）年9月に根室に戻った小野亀次郎によれば、6月にやってきたアイヌたちは、3頭の熊、60頭におよぶアザランとアシカならびに紅鱈でも収穫をあげていた。シュムシュ島の報效義会員が食料の欠乏を来たすと貸与するなど、援助もしていたのである⁹¹。アイヌたちは北千島において十分生活していくことを証明したのであった。

おわりに

明治26（1893）年の冬に続いて実施された明治27（1894）年の越冬には、白瀬臺を含む6名が参加した。しかし、彼らのうち三人が死亡し、明治28（1895）年8月に派遣された八雲丸によって白瀬らはシュムシュ島を離れた。日清戦争により報效義会の活動は、停滞したものの従軍を解かれた郡司が、事業を再開して明治29（1896）年9月にはシュムシュ島に再上陸し、報效義会による本格的な移住が開始された。また、郡司の活動により報效義会に対しての社会的認知も高まった。帝国議会から予算措置も講じられようになった。

アイヌの帰還問題では、ようやく試験的な帰還が認められた。明治30（1896）年6月から実施された試験的な帰還の結果を見て、本格的な帰還事業が展開する可能性が出てきた。

このように、千島列島の「内国化」は、徐々に進展していった。しかし、地域の海洋資源を保全するという点になると、必ずしも十分な成果を挙げていたわけではなかった。この点について、軍艦武藏の艦長遠藤増蔵は、千島列島におけるラッコ・オットセイ・クジラなどの漁獵の意義も含めて、次のように説明している。これらの漁獵は、忍耐と営利を求めることによって行われる。イギリス領コロンビヤやアメリカの西海岸から漁船に乗って日本の近海で活動することは、仕事に熱心である、と評価されるべきものである。これに対して日本人は、千島列島を「極北の領土」として、その厳しい気候に恐れを抱き、これらを顧みることなく「慧眼敏捷ノ欧米人、

無人ノ嶋嶼ヲ幸トシテ無敵ノ境ニ於テ臘虎ヲ獵獲スト」状況を訴える⁹²。彼らは、本稿が検討した「内国化」の施策も極めて不十分なもの、捉えられていたようである。

注

- 1 本稿が使用する「北千島」とは、地理的な位置を示すもので、政治的な意味を含意するものではない。
- 2 シコタン島に移住させられたアイヌの問題については、次の研究を参照した。海保洋子「北方領土問題と強制移住」〔『近代北方史 アイヌ民族と女性と』〔第1部・第3章〕三一書房、1992年6月〕。川上淳「樺太千島交換条約によるアイヌの強制移住」〔『日露関係の中のアイヌ』〔菊池勇夫編『日本の時代史19 蝦夷島と北方世界』第6章・第7節〕吉川弘文館、2003年12月〕。小坂洋右『流忘一日露に追われた北千島アイヌ』北海道新聞社、1992年7月)。ザヨンツ・マサゴジャータ『千島アイヌの軌跡』草風館、2009年3月。
- 3 本稿が使用する「内国化」という用語は、国際的な条約によって自国の領域に土地を編入するという意味ではなく、自国領に対する実効支配の確立を意味している。
- 4 報效義会の成立過程と明治26（1893）年から明治27（1894）年にかけて実施された越冬については、拙稿「明治中期の千島開発について」〔『新潟大学教育人間科学部紀要』10巻2号、2008年2月〕を参照していただきたい。
- 5 軍艦磐城については、外崎克久の「測量艦磐城」（解説〔145-164頁〕）を参照した〔『柏原長繁 磐城航海誌 明治の千島測量報告』〔1979年2月〕〕。
- 6 外崎克久編『磐城航海誌』130頁。
- 7 外崎克久編『磐城航海誌』130頁。白瀬臺によれば、軍艦磐城は、日清戦争の終結まで千島列島に航行する船舶が無くなることを懸念した「其の筋の内命を含み」報效義会員を引き揚げさせるためにシュムシュ島に来島した（白瀬臺『千島探検録』（1897年3月、東京図書出版合資会社、〔『シリーズ出にっぽん記—明治の冒険者たちー』11巻〈ゆまと書房〉を利用した〕）110頁）。
- 8 外崎克久編『磐城航海誌』132～134頁。「千島巡査日記」〔『北海道毎日新聞』〔以下『北毎』と略記する〕M28・3・9付。この「千島巡査日記」

- (『北毎』M28・3・9付／3・15付／3・26付／3・29付)は、農学士石川貞治の日記である。石川は、明治26(1892)年8月から9月に実施された農学士横山壮次郎の千島調査を引き継ぐ、という意向で千島列島の調査に向った。横山壮次郎の千島調査については、「千島巡検記」として『地学雑誌』(6集62号〔M27・2・25付〕／6集63号〔M27・3・25付〕／6集64号〔M27・4・25付〕／6集65号〔M27・5・25付〕／6集66号〔M27・6・25付〕)に掲載されている。
- 9 外崎克久編『磐城航海誌』134～135頁。
- 10 「千島巡検日記(続)」『北毎』M28・3・26付。
- 11 『磐城航海誌』139頁。「千島巡検日記(続)」『北毎』M28・3・26付。
- 12 白毫寺は、真宗本願寺派(西本願寺)の寺院で根室町大字弥生町二丁目番外地にあり明治14(1881)年から布教活動を行っていた(『根室千島実業名鑑』大正9年6月、160頁)。真宗本願寺派は、ホロムシロ島の硫黄に着目し、調査の上で見込みがあれば、500人から600人の信徒を移して起業しよう、と計画していた(「磐城千島彙報(続き)」『読売新聞』M27・7・9付)。
- 13 『磐城航海誌』139頁。
- 14 郡司成忠『千島探検誌』(影印本、1987年刊)、144頁。
- 15 「千島巡検日記(続)」『北毎』M28・3・29付。
- 16 『千島探検誌』3巻、148頁。
- 17 「郡司大尉帰京す」『読売新聞』M27・7・20付。
- 18 「郡司大尉帰京す」『読売新聞』M27・7・20付。
- 19 「郡司大尉内務省に出頭す」『読売新聞』M27・7・21付。
- 20 「郡司大尉帰京後の消息」『読売新聞』M27・7・24付。この7月23日の晩餐でも北海道に関係する榎本武揚農相・近衛篤磨公爵・谷干城子爵・小澤武雄男爵・山井兼文子爵らが井上毅文部大臣から官邸に招待されている(「井上文相、郡司大尉を饗す」(『読売新聞』M27・7・25付))。
- 21 「磐城千島航海彙報」『読売新聞』M27・7・8付。
- 22 杜川延三(神戸商業学校卒業者〔明治28年4月16日死亡〕)・葛原益吉(三重県尋常中学校卒業者)・山本敏(水戸尋常中学校生徒〔明治28年5月13日死亡〕)・関誠一(千葉県農家)・御園生龜三郎(千葉県農家〔明治28年5月7日死亡〕)。これら
- の経歴は、『千島探検録』(111頁)による。
- 23 『千島探検録』110頁。
- 24 「渡航の主意」(『千島探検録』、112頁)。
- 25 「渡航の主意」(『千島探検録』、114頁)。
- 26 「占守一周探検記事」『千島探検録』147頁。
- 27 「占守一周探検記事」『千島探検録』147頁。
- 28 「占守一周探検記事」『千島探検録』153頁。
- 29 『千島探検録』126～127頁。
- 30 「占守越年者の現状」『東京朝日新聞』M28・9・19付。「救難者顛末」『千島探検録』154頁。
- 31 田中は、「和歌山県横浜姿見町1丁目16番地」の「居留人」で、当時39歳であった(「救難者顛末」『千島探検録』154頁)。
- 32 「救難者顛末」『千島探検録』155頁。
- 33 「占守越年者の現状」『東京朝日新聞』M28・9・19付。
- 34 「占守越年者の現状」『東京朝日新聞』M28・9・19付。
- 35 『千島探検録』155～156頁。
- 36 「占守島復た終に無人島となる」『北毎』M28・10・6付。この八雲丸の派遣にあたっては、財部が五百円の「義捐募金」を募るなど尽力した。「義捐募金」の要請を受けた北海道庁長官の北垣国道は、五百円の内、百円を拠出し残金の四百円については、函館の有力者に相談する、と伝えている(『塵海』M28・2・9条および『千島探検録』130頁)。船長の武山惣次郎は、帝国水産会社のラッコ船千島丸に船長として乗船していた人物で、俗に「千島大王」と称されるほど千島列島の事情に精通していた(『千島探検録』38頁)。
- 37 『千島探検録』130頁。
- 38 『千島探検録』130頁。
- 39 『千島探検録』131頁。白瀬らは、シャスコタノに上陸した際、エカルマ島で死亡した鶴島久次郎・堀江彪・木村佐吉・中村重吉・島村金一の墓標を建てた。白瀬は、エトロフ島で軍艦磐城に乗り換え、10月19日に仙台に戻っている(『千島探検録』132頁)。
- 40 「占守島の報效義会員」『時事新報』M28・9・18付。田中久次は、シュムシュ島で報效義会員になり、海獣猟に従事することになった。
- 41 「郡司大尉の帰朝」『北毎』M28・4・7付。
- 42 松井は、報効義会の状況について、郡司が懸念している解散などは行われておらず、高い団結力を維持していることを伝えた(「報効義会は解散せず(東京特報)」『北毎』M28・6・27付)。

- 43 郡司の報告は、「千島占守島調査報告」として『地学雑誌』8集85巻(M29・1・10)と8集86巻(M29・2・10)に掲載された。
- 44 『地学雑誌』8集85巻(M29・1・10)。
- 45 「千島占守島調査報告」『地学雑誌』8集85号、24頁。
- 46 「郡司大尉へ貸与の帆船」『北海』M29・1・19付。石川丸は、明治9(1876)年海軍省の依頼で東京石川島において製造された二本マストの木造帆船で150トンほどの船であった。「海軍新兵練習船」として使われ、明治22(1889)年から「吳鎮守府」の所轄となった。
- 47 「郡司大尉の消息」『読売新聞』M29・4・2付。
- 48 「幻燈演説(郡司大尉)」『大阪朝日新聞』M29・4・16付。
- 49 H.J.スノーについては『千島列島黎明期』(H.J.スノー／馬場脩／大久保義昭訳、講談社学術文庫、1980年12月)を参照した。
- 50 「幻燈演説(郡司大尉)(承前)」『大阪朝日新聞』M29・4・17付。
- 51 「報效義会(出航及義捐)」『大阪朝日新聞』M29・4・18付。「占守島移住日誌(1)」(以下「移住日誌」を略記する)『東京朝日新聞』M29・10・28付。
- 52 「郡司大尉札幌に来る」(『小樽新聞』M29・5・9付)。
- 53 「九千円の下付(千島移民保護費)」(『小樽新聞』M29・6・9付)。郡司が札幌に来た時は、北海道庁長官に原保太郎が任命されたときであった。原がまだ北海道庁に赴任していなかったためにこの「保護費」を受け取ることができず、郡司は対馬嘉三郎に受領を委任して札幌を出発した。「保護費」は、明治29(1896)年6月10日、対馬によって受領され、郡司に送付された(「千島移住保護費の下付」『時事新報』M29・6・19付)。
- 54 『第九回 帝国議会衆議院委員会議録及両院協議会議事録』、12頁。
- 55 『帝国議会衆議院委員会議録 明治篇 6 第九回議会』(東京大学出版会)168頁。
- 56 『帝国議会衆議院委員会議録 明治篇 6 第九回議会』(東京大学出版会)169頁。
- 57 『帝国議会貴族院委員会速記録 明治編 3 第九回議会』(東京大学出版会)60頁。
- 58 「保護費」は、明治29年度が9000円、明治30年度と明治31年度が各年9500円として支給されることになった。『帝国議会貴族院委員会速記録 明治編 3 第九回議会』(東京大学出版会)62頁。
- 59 『船中日記 石川丸事務掛』明治29年6月19日条・7月7日条(この日記は、『(千島報效義会)日誌(明治29年)』[北海道大学北方資料室複写本〈別・千島951.7-Chi〉]の59丁目から掲載されている)。「移住日誌(1)」『東京朝日新聞』M29・10・28付。「移住日誌」は、報效義会東京支部長加藤洋によって『東京朝日新聞』に九回に亘って連載された。
- 60 『(千島報效義会)日誌(明治29年)』明治29年6月28日条。
- 61 小見貞子宛郡司成忠書翰(墨田区立図書館所蔵)明治29年7月17日付(舟川はるひ氏の御教示による)。『船中日記 石川丸事務掛』明治29年7月23日条。
- 62 当初、使用する予定であった石川丸の積載量が少ないとから、汽船五洋丸を借り入れることになった。(『移住日誌(1)』『東京朝日新聞』M29・10・28付。「移住日誌」は、報效義会東京支部長加藤洋によって『東京朝日新聞』に九回に亘って連載された)。
- 63 「移住日誌(2)」『東京朝日新聞』M29・10・29付。
- 64 清水興孝は、厚岸湖において牡蛎を採集し、シュムシュ島において牡蛎を養殖しようと計画していた。
- 65 「移住日誌(2)」『東京朝日新聞』M29・10・29付。
- 66 「移住日誌(3)」『東京朝日新聞』M29・11・3付。
- 67 「移住日誌(3)」『東京朝日新聞』M29・11・3付。
- 68 「移住日誌(3)」『東京朝日新聞』M29・11・3付。
- 69 『帝国議会衆議院委員会議録 明治篇 6 第九回議会』(東京大学出版会)158~159頁。
- 70 『帝国議会貴族院委員会速記録 明治編 3 第九回議会』(東京大学出版会)63頁。
- 71 「移住日誌(5)」『東京朝日新聞』M29・11・8付。
- 72 「移住日誌(5)」『東京朝日新聞』M29・11・8付。
- 73 「移住日誌(6)」『東京朝日新聞』M29・11・11付および「移住日誌(7)」『東京朝日新聞』M29・11・13付。
- 74 「郡司大尉一行移住概況(続)」『小樽新聞』

- M29・10・31付。
- 75 「移住日誌(9)」『東京朝日新聞』M29・11・17付。
- 76 実際に、明治30（1897）年には試験的な帰還が実施されることになる（「色丹土人の送還」『時事新報』M30・5・16付）。この問題は別稿で検討する予定である。
- 77 『自明治廿九年九月至明治三十年八月事業報告 報效義会』（以下『事業報告』と略記〔水産総合研究センター中央水産研究所図書・資料館所蔵〈祭魚洞文庫 AO211.H3〉〕）1頁。『事業報告』は、北海道庁に提出するために作成された「報告書」と推定される。その根拠は、「報效義会事業報告摘要(1)」（『北毎』M31・1・26付）に明治29年9月から明治30年8月までの「事業報告書を調整し旧臘を以て北海道庁に提出せり」と記されていることである。実際、『事業報告』は、明治29年9月6日から明治30年8月19日までの活動報告である。
- 78 『事業報告』1頁。
- 79 三棟は家族携帯者用、一棟は学校および演武場、二棟は単身者用・病院として使われることになった（『事業報告』2頁）。
- 80 『事業報告』3頁。
- 81 『事業報告』によれば、明治30（1897）年1月8日までに「水症病」で8人が死亡した。
- 82 『事業報告』5頁。
- 83 『事業報告』6頁。
- 84 『事業報告』7頁。
- 85 「北海道密猟警備軍艦武藏派遣ノ件及報告書」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C06091100000（防衛省防衛研究所所蔵『明治30年 公文備考 艦船2巻5』0774）。
- 86 「北海道並ニ千島警備ニ関スル第二回報告」JACAR.Ref.C06091100000（防衛省防衛研究所所蔵『明治30年 公文備考 艦船2巻5』0805-08212）。
- 87 「北海道並ニ千島警備ニ関スル第二回報告」JACAR.Ref.C06091100000（防衛省防衛研究所所蔵『明治30年 公文備考 艦船2巻5』0806）。
- 88 「北海道並ニ千島警備ニ関スル第二回報告」JACAR.Ref.C06091100000（防衛省防衛研究所所蔵『明治30年 公文備考 艦船2巻5』0808）。「色丹土人極北のパラムシロに還る」『読売新聞』M30・7・4付。
- 89 「色丹土人の幌筵島還住に就き」『北毎』M31・9・8付。
- 90 「千島色丹土人の愛別離苦」『読売新聞』M30・8・2付。
- 91 「色丹還住土人の最近消息」『小樽新聞』M30・9・23付。
- 92 「北海道並ニ千島警備ニ関スル第二回報告軍艦武藏」「北海道並ニ千島警備ニ関スル第二回報告」JACAR.Ref.C06091100000（防衛省防衛研究所所蔵『明治30年 公文備考 艦船2巻5』0806）。